
家ごと幻想入り

erow

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家ごと幻想入り

【Nコード】

N3672BA

【作者名】

erow

【あらすじ】

子供の頃は虐待され、学生の頃は震災に遭い、社会人になってからは同僚に濡れ衣を着せられて刑務所に。後に冤罪とわかったが。生まれてこの方不幸続きの私が、今度は訳のわからない場所に家ごと連れてこられた。

ここの名前はある人曰く、幻想郷と言っらしい。

第0話

人生は山あり谷ありと言うけれど、全くその通りだ。というか山と谷しか存在しなかった。小さい頃は虐待されて育ち、高校ではいわゆるボツチだった。その高校は志望校を落ちて、二次募集で入った学校。そこでなんとか勉強して看護学校に進学。辛い実習と国家試験を乗り越えて晴れて看護師になったと思ったら、今度は他人のミスを押し付けられて人殺しに仕立て上げられた。後でそれは誤解と判明したものの、誤逮捕で丸一年をブタ箱で過ごした。そのせいで仲良くなっていた彼女にも逃げられた。

「ついてねえよなあ……」

一応そのあとは警察を訴えて結構な額の慰謝料をもらったが、それも後述の理由で消し飛んだ。どこの病院に就職を希望しても名前を書くだけで落される。年金もそれほど積み立ててないので、老後は厳しい物になるだろう。

いつそのこと看護師の体力を活かして転職すべきかとも考えたが、病院と同じく評判が下がると言われて落されるのがオチだろう。

ついでにこんな私を困ってくれた祖父も治療の甲斐もなく去年肺癌で逝去してしまった。高い金を払って祖父を任せたというのに、そこらに転移して手遅れと。なんとも、悲しい事だ。保険金は碌でなしの父親の元に。家は治療費をチャラにする代わりに買い取ってやったが、築百余年の田舎の家は一人とペットで過ごすには広すぎる。

妹に結婚祝いとしてくれてやろう。ペットの世話も、きっと美味くやつてくれるだろう。

「よし、決めた」

そうと決まれば話は早い。とりあえず妹に「かねてからの夢であった、世界遺産巡りをしてくる。まずは国内から」とメールを送り、家と口座の金は全て妹に託す。ただし親父にはびた一文渡さず、敷居も踏ませるな、と一通りの書類を書き終えてからはした金と最低限の旅行用グッズを持って玄関を出る。と、そこは竹林だった。

「あれ？」

左右を見渡すが、その左右も濃密な竹林。

「…え？」

後ろを見れば、見慣れた我が家。えっと、俺の家の前は確か県道だったはず。その向こうには水田が並んで、さらにその向こうに川が。

うん、間違っても竹林なんかなかった。世界遺産巡りに行こうと思っただのに、どうして竹林旅行なんかに？ とりあえず妹に目的変更の知らせを入れなければ。

今時はやりのスマートフォン。ではなく、間違えて世界遺産旅行用に購入したイリジウム衛星携帯電話を取り出してしまった。衛星携帯電話をポケットに戻し、今度はちゃんとスマートフォンを取り出す。

「圏外……」

まあ、圏外なら圏外でもいい。それならばこのイリジウム携帯の
出番……

「使えない…だと？」

そんな馬鹿な事があつてたまるか。『たとえエベレストの頂点でも使えます』と言われて買ったのに、エベレストでなくこんな竹林でダウンだと？ そんなものか！ 所詮は売り文句か！！

「くそ、騙された！」

仕方ない。仕方ないから家に帰ろう。私の人生、本当に躓いてばかりだ。不幸の星の下に生まれたとは思えない。

躓き人生に、家ごと幻想入りが追加されました。

第一話 資源の獲得は最優先

さて、どうしようか。今まで不幸続きだったとは言え、さすがに見知らぬ場所に家ごと拉致された。あるいは転移？　するなんて事態に遭遇したことなんてなかった。俺が某ラノベの主人公くらい不幸に慣れていないと発狂するんじゃないか。

「ついてねえな」

しかし、家があるのはまさに不幸中の幸いか。家がどうしてここにあるのかはわからないが、考えても仕方のないことだ。それにしても腹が減った。

「…飯の準備でもするか」

夢なら腹も減らないだろうし、これは夢ではないということだろう。腹が減っては戦は出来ぬとも言っし、とりあえず腹ごしらえをしてからどうするかを考えるとしよう。つい昨日買い物してきたし、レトルトカレーでも食べよう。

と、レトルトカレーを温めようと思った矢先、ここで重要な問題が一つ出てきた。

電子レンジに冷凍ご飯を入れて温めようとしたら、電気がつかない。電化製品によってサバイバル能力を削り取られた現代人にとってなんと辛いことか。

仕方ないので蒸して解凍することにする。

が、今度は水が出ない。コンロはガスがあるからまだしばらくは大丈夫だろうが、水が出ないのは困る。食事は一週間なくても死なないが、水は三日飲まなければ死んでしまう。

ならば探しに行かねばなるまい。水を求めて放浪する。これが世紀末というやつか。

「いや、違うだろ」

世紀末なら核戦争で世界が全て荒地に変わってないとだめだ。そしてモヒカンがバイクに乗って火炎放射器で汚い爺さんを消毒していないと。こんなのは少々キツイだけの現代生活であり、少し工夫すればどうにでもなる。

「こんなの、かつての大震災の時に比べればなんでもないさ」

過去の震災のことを思い出し、断水断線電気無しのと看どうしていたかを考える。幸いガスならある。さつきコンロが点くかどうか確かめた。除草用のバーナー（火炎放射器）のガスもある。今心配すべきことは少ない。

あのときは川の水をバケツにくんで、布で簡単にろ過して、加熱殺菌してから飲んだ。今回も同じ方法でいこう。周りは竹林だし、川はなくとも地下には水があるのだろう。今後この竹林に住むことになることを考えれば、井戸を掘り水を得ることも視野に入れておくか。しかしまずはいたずらに労力を消費するよりも湧き水を探すべきだ。とりあえず家の周囲を探し、なければ竹林の中へ繰りだそう。

「で、運良くありましたと」

家の周りを一周したら、なんとまあ都合のいいことに台所の裏口を出たところに、澄んだ湧き水がありましたとき。これなら井戸を掘らなくてもよさそう。それに、今の時期ならタケノコも生えて

るだろう。とりあえず今日は家の中に何があって何が無いかを確認して、後日家を中心に歩きまわって人が居ないか探しに出よう。

謎の少女x3とエンカウト

それは食事中、突然に起きたことだった。私は蝋燭を電気の代わりに立てて食事をしていたのだが、一口目を食べようとしたら目の前に黒髪の美少女が逆さに降ってきて、驚いて固まっている私の手からスプーンと皿を奪い取り、そのまま注意する間もなくカレーを平らげてしまった。

というか、逆さになったままでよく食べれるな。

「それは私の食事なんだが」

「……」

黙ったままプイと横を向いて、空になった皿の上にスプーンを置いて返してくる少女。大人を舐めてやがるのか。

「なあ」

「……守っているのですだから、この位の無礼は許してください」

少女はジト目で私をにらみ、ギリギリ聞こえる声でつぶやくと一瞬で靄になって消えた。

まったく、なんなんだ。夢を叶えに行こうと思ったら、知らない所に出るし、見知らぬ少女に飯は食べられるし。今までの不幸と比べれば蚊に刺されたようなものだが。

「しかし、守ってあげるとは何だ？」

ビスケットを箱から出して、ポリポリとかじりながら考える。が、答えが出るはずもない。第一、あんな少女は初めて見たし、守ってもらった覚えもない。が、妙に懐かしいような雰囲気が出てならな

かった。なんともおかしい。

「……………」

それはさておき、どこからか見られているような気がしてならない。観察されているような、まわりつくような視線が……。

「そこ！」

バスケットを銭形平次の投げ銭のように、視線を感じる方向、部屋の隅にぶん投げる。

「ッ！？」

結果バスケットは何もない空中で粉々に砕け、空間に僅かな揺らぎが生じ、一瞬だけ人形が見えた。これは『誰か』が居るという紛れも無い証拠だろう。探索用に用意しておいたナタを抜いて、謎の相手を威嚇する。

「誰だ！ 住居不法侵入で警察に通報するぞ！」

とは言ったものの、衛星携帯電話すら使用不能。電気が全くないので固定電話も使用不可。というか、使えたとしても電話線がないとダメだろう。そういうわけで、こんな脅しは実際には無意味なのだ。

狭い部屋の中で、移動する気配と勘だけを頼りにナタを向け続ける。

「……………まさか、私の姿が見えてるの？」

何かぼやいているのが聞こえたが、さっきの少女とはまた違う声。声の高さからして、女か。

「もう一度聞くぞ。お前は誰だ！」

「……」

語気を強めて聞くが、答えない。相手の詳細な位置は、足元が絨毯なので凹みでわかる。

「答えないか」

「少なくとも怪しいものじゃないわよ」

それはひょっとしてギャグで言ってるのか？ 光学迷彩を着て人の家に勝手に侵入するやつが怪しくないなんて、ギャグ以外の何物でもない気がするんだが。

「隙あり！ つギャン！？」

「！？」

隙あり、確かにそんなセリフが聞こえたんだが、その声の主らしきウサミミをつけた人物がさっきの謎の少女に立ち腕固めを極められて呻いていた。

もう何がどうなっているのかわからない。

「主様、この不届者、どうなされます？」

「……どうすると聞かれてもな」

されたことといっても、住居不法侵入程度。実害があつたわけでもなし。こんな美少女ならちょっとした不法侵入程度、軽く許せる。というか、ちょっとスルーしたけど主様って、いつから俺はこいつ

の主人になつたんだ。

「改めて聞くけど、君等は誰だ？」

「私は家子と申します。当代主様は靈感が薄かったようなので、気がつかれなかったようですね」

黒髪の少女、家子と言うらしいが、その子が言うには私はこの子と何年間も一緒に居たらしい。いや、それより先祖代々ってなんだ。気になるが、また後でじっくり聞かせてもらおう。

「そっちのウサミミさんは？」

「……」

「まあ、ひとまずは愉快なお客さんとして歓迎よう。菓子と茶を用意するから少し待っててくれ」

女の子には優しくするのが紳士というもの。しかし、用意するのは一人分、ウサミミの少女の分だけ。黒髪の方には何も出さまい。カレーの恨みだ。

で、お茶とお菓子を持って戻ればまだ関節を極められたウサミミさん（仮称）が。

「いい加減離してやったらどうだ、家子ちゃん」

「わかりました」

私が言つとウサミミさんをすぐに離して、片膝について私を見上げる家子ちゃんとやら。

「イタタ……」

「大丈夫か？」

左肘を手で抑えながら立ち上がるので、一応尋ねておく。もし関節を痛めているなら処置が必要だ。幸い、処置の仕方は看護学校の授業の内容の中に含まれていたのを覚えているのでわかる。

「大丈夫です。関節を痛める一歩手前で抑えておきましたから」

「お前には聞いてない」

「その子の言うとおり、確かに関節は傷んでないです。痛いんですけど」

痛むだけで傷めてないなら、治療するまでもないか。見たところ腫れてもないようだし、痛みなら時間が経てば引くはずだ。

「とりあえずようこそ、お客さん。このお茶とお菓子はサービスだ。お金はいらんから話を聞かせてくれるとうれしい」

「話？」

「ここがどこなのかとか、あんたの名前とか」

自分の分のお茶を啜りながら聞いてみる。これで話してもらえて色々と情報が手に入ればいいのだが。

「……やっぱり外人か」

「外人人？ 私は日本人だが」

「国の話じゃないわ。説明するとなると、かなり信じがたい話だろうけど聞いて頂戴」

信じがたい話とは何だ。北の某国に連れ去られたとか、そういうのではないだろう。北の某国ならまず言葉が通じないだろうし。昔の日本にタイムスリップしたとか、そういうのか？ そりゃないか。

昔ならウサミミブレザーなんて無いよな。

「ここはあなたの元いた場所とは違う世界。幻想郷という世界よ」
「まさかのお伽話か」

そんな馬鹿な話がある訳ない。ある訳ないと思うんだが、頭の隅でどこか現実ではないかと疑っている自分も居る。爺さんも言っていたじゃないか、常に物事を多角的に見るようにしろ、と。そうして今までの不幸を乗り切ってきたのだから、今回もそうして考えて環境に順応するべきだろう。

「信じるも信じないも自由よ」
「それが本当だと仮定して、どうすれば元の世界に帰れる？」

せつかく世界遺産旅行に行こうと計画を立てていたのに、これじゃあ台無しだ。世界遺産巡りよりも珍しい出来事には出会えたけども。

「私は帰る方法を知らないわ。管理者か、博麗の巫女に聞いて頂戴」
「管理者、博麗の巫女って誰だ」
「八雲紫は胡散臭いババア。博麗の巫女は凶暴な猪女」

ババア、って。えらくひどい言い方だな。

「誰がババアですって？」
「！？」

鈴の鳴っているのか、それとも猫が鳴いているのか、あるいはうら若い女性の話し声か、全く判別のつかない声が後ろから聞こえ、振り向いてみれば、黒い裂け目から上半身だけ乗り出した美女が、

こちらに微笑んだ。

「ひゃああ！？ 痛い！！」

思わず素っ頓狂な声を上げて転んでしまい、机の角で頭を打った。

「あら、大丈夫？」

「だだだだ、誰だ！？ どこから入った！？」

慌てすぎて若干噛んでいるが、なんとか言い切れた。しかしこの女性、何者だ？ 本当に足音も何も無く、突然空中に現れた。瞬間移動の手品みたいにタネでも仕込んでたのか？

「これは失礼致しましたわ。私は八雲紫、幻想郷へようこそ、外来人と、その住居」

空間の裂け目から出て、扇子をで口を隠しながら微笑む紫さん。

「その玉兎は巢穴で反省なさい。この人には私が話をしておきます」

さっきの裂け目がウサミミさんの足元に広がって、そのまま裂け目に落ちて飲み込まれた。

「さて、それじゃ少しお話ししましょうか。幻想郷のこと、貴方のこと、その子の事について」

「お手柔らかに…」

こうして、私の幻想郷での生活が始まった。

管理者の難題

ウサミミさんがどこかに消え、八雲紫さんにここ幻想郷について色々と説明された。

曰く、私が元いた世界から隔離された世界であり、忘れられ去られた者たち、妖怪、神様、妖精などの楽園。普通なら一笑してあとはスルーしてしまうところだが、目の前で空中浮遊なんてされれば嫌でも認めるしか無い。

で、なんで私がこんな所に居るのかと聞いてみれば、これがまたふざけた理由だった。

「面白い人生を送っているようだからずっと見てたのに、私の目の届かない場所に行かれると楽しみが一つ消えてしう。だからこれ以上楽しめないなら食べてしまおうと、ここに案内したのです。この家は、本来なら予定に無かったのですけれど」

いくら美女でも知らない間にずっと監視されていたとなると、背筋が寒くなる思いだ。

しかし、そんな自分勝手な理由でここに連れてこられたのだとなると、激しい憤りを禁じ得ない。

「そんなくだらない理由でよくも人の夢をぶち壊しにしてくれたな……」

せつかくかねてからの夢だった世界遺産旅行へ行こうと準備も整えていたのに。なんという自分勝手に人の都合を考えない非道。まるで人でなしだ。

「そもそも人じゃありませんもの」

「そもそも人を拉致することに罪悪感を感じないのか」

考えを読まれたかのように的確な指摘をしてくる。薄々気がついてはいたが、やっぱり人じゃなかったのか。

「あなたは食事をするのに一々罪悪感を感じて？」

「なるほど、人を拉致するのは妖怪にとって食事をするのと同じようなことか。いや、拉致するのは食べるためだから食事と同じか」
「そうですわ」

私はこの女性に美味しく頂かれてしまったためにここに連れてこられたと。いやしかし、それだとなぜすぐに食わない。怯えさせたほうが味が良くなるとか、そういう考えか？ それにしては対話をしたり、怖がらせる素振りが全くないのはなんでだ。

「けど安心なさい。あなたがこの家の中にいて、あなたの能力が消えない限り、寿命か病気以外で命を落すことはありえない」

「当然です。この家の中に限り主様は私が守ります」

ここで姿は見えないが、どこからか家子の声が聞こえてきた。もしかして、いや、もしかしなくてもあいつも人でないのか？ 人でないなら、妖怪か。ということは、今まで私は妖怪と同棲していたのか。

「そういうわけで私は退散させてもらいます。目の前にオヤツがあっても食べられないのは少し悔しいですわ」

怖いな、さっきの口ぶりだと家の外に居たら食われてたのか。人間の肉は臭くてマズイと聞くが、妖怪にとっては美味しいのか？ それとも末期の恐怖を感じ取って、それを食事として食べてるのか。

「待て」

「なに？ 早く帰って寝たいのだけれど」

「食わないなら元の世界に帰らせてくれ。いや、帰らせてください」
「……」

私が土下座して言うと、顎に指を当てて考える素振りをしてみせた後に、口を開いた。

「お断りしますわ。ここであなたの苦勞を見て、観察して楽しませてもらいます」

「なん…だと？」

空間の裂け目にこうなれば、意地でも捕まえて自分から送り返したくなるようにしてやる以外あるまい。

背中を向けて裂け目に飛び込もうとする彼女に飛びつく。

「レディに対して乱暴なのはいただけないわ」

組み付いた直後にその細い体のどこからそんな力が出るのか、と聞きたくなるほど強烈な力で振り払われ、追い打ちにどこからか取り出した傘を振り下ろしてきた。

「っ！？」

殴られる、そう思って腕を上げたが、傘が当たる直前で見えない壁に阻まれたかのように、目と鼻の先で停止していた。

「セクハラに対する制裁にまで手を出すことはないんじゃない？
九十九神さん」

「主様をあらゆる脅威からお守りするのが役目ですから。あと私には先代主様がつけてくださった家子という名前があります」

何がどうなって傘が止まったのかはわからないが、とりあえず家子ちゃんに助けられたのは確かだろう。あの力で殴られたら、多分痣じゃすまなかったと思う。

「帰してくれと言う話だけれど、そうね。遊びに付き合ってくればいいわ」

「遊び？」

「そう、遊び。鬼を四匹捕まえてくるっていう、簡単な遊び。吸血鬼を二人に、常に酒の入った瓢箪をぶら下げている鬼。それと地獄で一番強い鬼。それを捕まえて、もちろん説得するでもいいいわよ？ 一人ずつでもいいから私の前に連れて来ること。それができれば、元の世界に戻してあげましょう……（その時の気分によるけど）」

鬼を捕まえてこいとは、また予想外のお遊びだ。鬼って言ったら日本の妖怪の代表格じゃないか、実在するとしたら、とんでもない話だぞ。

「けど、元の世界に帰すだけじゃ対価に見合わないから、死なずに連れてこれた場合は……ご褒美をあげるわ（それが必ずしも良い物とは限らないけど）」

……なんということだ、認め難いことに、ご褒美という単語と表情、声色のせいで、愚息が反応してしまった。座るような姿勢のお陰でバレずに済んでいるようだ。最後に何か呟いていたような気がしたが、何か碌でもないようなことな気がする。

「それじゃあ、精々頑張ってくださいな」

「そんな甘言に躍らされるほど私が馬鹿に見えるか！」

今度は飛びかかるほどの距離でなく、普通に手を伸ばせば相手をつかめる程度の距離なので、祖父直伝の技の本領を発揮できる。

見事かけることが出来れば、相手はかけた相手が放すまで抜けれない。

彼女の腕に手を伸ばし、その手首をつかむ。

「おろ？」

掴んだと思ったら、つかんだものは自分の腕だったという。おかしいな、私は確かに彼女の腕をつかもうとしたのだが……催眠術とか超スピードとか、そんなチャチなものじゃないような物を見た。しかし最も驚くべきは、自分の腕が途中から切れて、もう片方の手をありえない角度から握っているなんて……！

「まあ、諦めて頑張りなさい。いくらでも待っててあげるから」

それだけ言って八雲紫は亀裂の中へ身を投じ、私の前から消え失せた。

「神は死んだ……」

よくわからん場所に連れてこられたと思ったたら、よくわからん女の子に主と呼ばれ、今度はよくわからん女に条件付きで帰してくれる、と言われ……もう何なんだよ畜生。

「九十九神なら居ますが」

「……はあ」

九十九神とか妖怪とか鬼とか、もうどうでもいい。私の中の常識が崩壊してきた。鬼とかそういうのはお伽話の中の存在だと思っ
てなかったのに。

「もういい。やれってんならやってやるさ……」

もうこうなれば、鬼だろうと吸血鬼だろうと、帰るためなら捕まえてやる。死んだなら死んだでそこまで。その時は大人しく諦めずに、もがいて死のう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3672ba/>

家ごと幻想入り

2012年1月14日22時49分発行